

アクションリサーチとしての無住化集落再生活動におけるアクター・ネットワーク —京都市北部における無住化集落再生活動（その3）—

			正会員	○山口純*
			正会員	本間智希**
			正会員	松崎篤洋*
無住化集落	アクションリサーチ	アクター・ネットワーク理論	正会員	川勝真一***
廃村	消滅集落	大見	正会員	北雄介****

1 はじめに

日本の地方には今度、過疎集落のみならず無住化集落が多数生じるだろう。こうした無住化集落は、市民が中心となって新しいライフスタイルを探究するフロンティアとなる可能性を持っている。ここでライフスタイルという言葉には、個人的な生活のあり方だけではなく、人やモノの織りなす動的ネットワークのあり方も含めている。さらにこのようなライフスタイルの変化は、規範の変化をとまなうものとなるだろう。

2 研究の目的：無住化集落の可能性

本論は京都市左京区大原大見町（以下「大見村」）という無住化集落の再生の試みである「大見新村プロジェクト」を取り上げる。その1）では大見村の地域資源と無住化の経緯を述べた。その2）では大見新村プロジェクトの発足と展開について述べた。

その3）では、研究の方法としてのアクションリサーチとアクター・ネットワーク理論（ANT）について説明した後、大見新村プロジェクトの活動そのものがアクションリサーチとして見なせることを示す。つまりこのプロジェクトは、大見村という無住化集落の可能性を問う研究として見なされる。本研究はこの自己言及的な構造を意識的に取り入れる。本論の目的はこの自己言及的な構造を通じて無住化集落の可能性を明るみに出すことにある。

3 研究の方法：アクションリサーチとANT

研究の方法としてはアクションリサーチを採用している。アクションリサーチは実践を通じて状況を改善することを目的とする研究であり、理論と実践を不可分のものとみなす。この意味で、理論と実践を厳密に区別しようとする実証主義と対比することができる。実証主義的なアプローチにおいて研究者は研究対象を外部から客観的に観察するものと想定される。アクションリサーチは、観察が恣意性を免れ得ない枠組み依拠することに意識的であり、実践を通じたその変革に注力する。研究者は研究対象に入り込み、内部からそれを観察し、それに働きかける¹⁾。

筆者らは大見新村プロジェクトのメンバーとしてこの活動に参加しつつ、その活動を研究している。後で述べ

るようにこのプロジェクトの活動じたいが、アクションリサーチとしてみなされる。無住化集落再生についてのアクションリサーチの先事例は見当たらないが、過疎地活性化運動については杉万らの研究がある²⁾。

次に研究対象の記述に関するアプローチとしてANTを採用する。ANTは科学論においてラトールが導入し、最近ではヤネヴァが建築家コールハースのオフィスにおける設計活動の分析をこの見方で行っている³⁾。人/モノ、社会/自然といった象徴的枠組みを極力排して、プロセスに関わる物事をフラットにアクターとして扱い、それらのネットワークの振る舞いを記述する方法である。

杉万は特に規範の生成と変容という観点から活性化運動を捉えている。そこで彼は大澤の規範理論に依拠する⁴⁾。本研究は無住化集落再生の活動における規範の生成と変容に注目しつつも、これをアクター・ネットワークの生成と変容と不可分なものとして理解しようとする。

4 アクションリサーチとしての大見新村プロジェクト

先に大見新村プロジェクトの活動そのものがアクションリサーチとして見なせると述べたがそれはどういうことか。その2）で述べたように、プロジェクトの活動は主に京都市中心部のオフィスと大見村の二カ所で行われており、オフィスでは月2回ミーティングを行っている。そこで多様なアクターの多様な形でのプロジェクトへの関わりを許容するような枠組みが模索された。たとえば、プロジェクトのメンバーと、それ以外のワークショップなどの参加者の位置づけ、そして定住者とそれ以外の関係者の位置づけを連続的に捉えるために、それぞれを「〇割村民」といったように呼ぶといった工夫が検討されてきたのであった。

こうした試みは、既存の枠組みでプロジェクトを固定的に理解することを拒否するものであり、このプロジェクトの活動がそれ自体として無住化集落の可能性についての探究であることの表れであると思なう。そしてこの探究を通して、定住に拘らない多様な立場・多様な仕方からの関与によって無住化集落を再生させるというビジョンが培われてきたのである。

探究としての大見新村プロジェクトは、異種混合的なアクター・ネットワークによって遂行されている。以下

ではこのネットワークのいくつかの局面を検討する。

5 プロジェクトのアクター・ネットワーク

5.1 アクター・ネットワークの生成

大見新村プロジェクトは大見村の元住民やその子孫を、大見村にそもそも縁のない人々と結びつけた。そこでは「地縁」だけでなく「志縁」を媒介として、プロジェクトのメンバーやワークショップ参加者といった人々のネットワークが育まれていった。ANTの見方からは、こうした人々だけでなく、さらに関係する非人間（たとえば、川、草木、自動車、自転車、鹿、農地、シコブチ神社、空き地、空き家、拠点とする古民家などが重要な非人間アクターとなるだろう）も加えた異種混合的なネットワークが形成されたと見なせる。

5.2 アクターとしての大見川

このネットワークを構成する一員としての大見川の振る舞いを追って見る。その2)で見たように、大見川は台風で氾濫し畑を流し神社を倒壊させた。大見川は安曇川の支流であり、安曇川の流れを神格化したのが、筏流しの神としての「シコブチ」であった。この意味では大見川は流域の他地域と大見を結びつけ得るものであり、また大見思子淵神社を倒壊させることでプロジェクトメンバーや元住民を結びつけもした。このように一つのアクターは、通常概念的枠組みにおいては区別されるレイヤーにおいて、多義的に振る舞っている。

5.3 アクターとしての大見村

プロジェクトのメンバーには大見村という場所に惹かれて参加している者も多い。大見村という場所じたいがアクターとしてプロジェクトのアクター・ネットワークの一員となっている。場所にアクターとしての主体性を認める立場は環境倫理においても提唱されている⁵⁾。この見方は功利主義に對置することができる。功利主義的な立場からは、場所は居住者などの人間の目的のための手段として利用されるべきものである。場所を主体として見なす立場からは、「場所が何を欲しているのか」を問うことができる。居住者のある場所に比べて、無住化集落では、非常識に聞こえがちなこのような問いを發することが容易であるかもしれない。

5.4 非二元論的活動としてのワークショップ

プロジェクトの活動は、労働/余暇、消費/生産といった既存の二元論的枠組みに収まらない。このことは大見村において開催される「畑の復旧」「神社の解体」のようなイベントやワークショップにおいて顕著である。たとえば「鹿革鞣し」という、これまで忌避されることの多かった作業を行うワークショップに、のべ68人も参加者がお金を払って加わった。ここで「鹿革」は新たなエージ

エンシーを發揮している。二元論的枠組みに収まらないアクター・ネットワークにおいて規範の変容が生じると共にアクターの振る舞いも変化するのである。

5.5 多様性を許容するフロンティアとしての無住化集落

大見新村プロジェクトは単一の目的に向かって一致団結するような集まりではなく、個々のメンバーが少なからず別々の関心から参加し、別々の方向性で活動を行っている。つまり、このプロジェクトは単一の意味付けを担うのではなく、多様に「翻訳」され、多様に生成されている。探究のきっかけとなるのは差異であるとするれば、このような多様性はアクションリサーチにとって好ましい。大見村が無住化集落であり、そのために支配的な規範が強く存在しないということが、この多様性を許しているのかもしれない。例えば智頭町における活性化を研究した杉万は、地域の有力者の持つ保守性・閉鎖性が活動を阻害したことを指摘している²⁾。柄谷は古代ギリシャのイオニアにおいて、そこがフロンティアであったために「無支配」が実現したと考える⁶⁾。同じように、現代日本における無住化集落はフロンティアとして「無支配」を指向する場となりうる可能性を秘めているのではない。

6 結論と課題

大見における無住化集落再生の活動は、それじたいとして、無住化集落の可能性を探究するアクションリサーチとして見なせる。無住化集落の再生に関わる概念的枠組みが、実践を通じて更新されてきた。つまりアクションリサーチとしてのプロジェクト活動を通して、無住化集落の再生を、定住者の獲得に拘らずに、多様な立場・多様な仕方による関与者の輪を広げることによって実現するというビジョンがもたらされた。このアクションリサーチの有り様をANTを通じて見てきた。つまり、人やモノを含む異種混合的ネットワークによって探究が行われると見るのである。そこで、川、場所、革といった人間以外のアクターがどのようにこのネットワークを広げてきたのかを追った。無住化集落には強い支配的規範が存在しない。このために、無住化集落は、より多様なアクターの異種混合的ネットワークを許容し、新たなライフスタイルへと向けた探究の場を与えると考えた。

参考文献

- 1) パーカー, イアン: ラディカル質的心理学: アクションリサーチ入門, ナカニシヤ出版, 2012
- 2) 杉万俊夫: コミュニティのグループ・ダイナミクス, 京都大学出版会, 2006
- 3) Yaneva, Alben: The Making of a Building: A Pragmatist Approach to Architecture, Peter Lang, 2009
- 4) 大澤真幸: 身体の比較社会学(1), 勁草書房, 1990
- 5) キャリコット, ベアード: 地球の洞察, みすず書房, 2009
- 6) 柄谷行人: 哲学の起源, 岩波書店, 2012

*立命館大学

**RAD -Research for Architectural Domain-

***京都工芸繊維大学

****京都大学

* Ritsumeikan University

** RAD -Research for Architectural Domain-

*** Kyoto Institute of Technology

**** Kyoto University